南京大虐殺

生存者の証言

◉ 朱成山 編著

外文出版社

南京大虐殺

生存者の証言

◉ 朱成山 編著

常州大学图书馆
藏书章

外文出版社

图书在版编目（CIP）数据

南京大屠杀幸存者证言：日文 / 朱成山编著.
—北京：外文出版社，2016
ISBN 978-7-119-10277-1
Ⅰ.①南… Ⅱ.①朱… Ⅲ.①南京大屠杀－史料－日文
Ⅳ.① K265.606
中国版本图书馆 CIP 数据核字（2016）第 166593 号

选题策划：徐　步
出版指导：胡开敏
责任编辑：曹晓娟
日文翻译：夏和文
装帧设计：杰瑞设计
印刷监制：冯　浩

南京大屠杀幸存者证言

朱成山　编著

©2016 外文出版社有限责任公司

出 版 人：徐　步
出版发行：
外文出版社有限责任公司（北京市西城区百万庄大街 24 号　100037）
http://www.flp.com.cn
电话：008610-68320579（总编室）　008610-68996064（编辑部）
008610-68995852（发行部）　008610-68996183（投稿电话）
印制：北京飞达印刷有限责任公司
开本：787mm × 1092mm　1/16
印张：13.75
2016 年 7 月 第 1 版第 1 次印刷
（日）
ISBN 978-7-119-10277-1
（平）
06900

版权所有　侵权必究　如有印装问题本社负责调换（电话：008610-68996172）

1937·12·13—1938·1

犠牲になった人たち

生存した人たち

抵抗した人たち

後世の人たちに捧げる

2016年初版発行

ISBN 978-7-119-10277-1
© 2016 中国 北京 外文出版社有限責任公司
外文出版社有限責任公司出版
中国北京百万荘大街24号
〒100037
http://www.flp.com.cn
中国国際図書貿易総公司発行
中国北京車公荘西路35号
〒100044
北京P.O.Box399
中華人民共和国にて印刷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序 言

集団虐殺編
国際安全区内での日本軍の集団虐殺に遭遇した
　生存者５名の記憶　9
南京城内での日本軍の集団虐殺に遭遇した生存者7名の記憶　22
南京城外での日本軍の集団虐殺に遭遇した生存者8名の記憶　40
長江沿岸での日本軍の集団虐殺に遭遇した生存者６名の記憶　62

各地での虐殺編
9名の生存者および家族親類の日本軍から受けた暴行の証言　79
6名の生存者が自宅で日本軍から受けた暴行の証言　103
7名の生存者が国際安全区で日本軍から受けた暴行の証言　116
11名の生存者が街中、村落、寺、川辺、野外で日本軍
　から受けた暴行の証言　133

強姦輪姦編
11名の生存者が日本軍から受けた強姦の悪夢　164

略奪・破壊編
5名の生存者による日本軍の放火、略奪、破壊行為の証言　196

あとがき

序言

朱成山

中国人民抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利70周年を記念して、外文出版社から私の執筆による南京大虐殺の生存者による証言集の編集出版、および多くの外国語に翻訳して外国の読者に伝えていくという話を受けた。十分な意義を持つ取り組みであり、さっそく賛同と支持を伝えた。

南京大虐殺とは中国を侵略した日本軍が1937年12月13日から1938年1月にかけて南京市一帯で実施した虐殺、強姦、放火、略奪などの暴行の総称である。1937年12月13日に南京城が陥落し、南京にいた守備軍8、9万人の一部は捕虜になり、一部は民間人に紛れ込み日本軍に追われていた。日本軍第十六師団長・中島今朝吾は12月13日の日記に「基本的に捕虜政策は実施せず、すべて徹底的に壊滅する方針を決めた」と記している。この方針にもとづき、捕虜の多くや軍人だと疑われた青年、壮年は長江や秦淮河の川辺、池、広場、山のふもとなどの地に押し込められ、集団虐殺された。千人以上の虐殺が実施された所だけでも漢中門、魚雷営、中山碼頭、下関、煤炭港、草鞋峡、上新河、鳳台郷・花神廟、燕子磯、宝

塔橋など十数ヵ所あり、遭難者は19.5万人に上る。虐殺はあちこちで行われており、そのような各地での散発的な虐殺は対象面積が大きく、統計化することは難しいが、確実なもので870回以上に達した。この大虐殺で、日本軍は銃で撃つ、刺殺する、首をはねる、刀で真っ二つにする、腹を裂く、心臓をえぐる、溺れさせる、焼く、生き埋めにする、犬に食わせる、のこぎりで引く、キリで突き刺す、目を突き刺す、生殖器を切る、陰部の中を刺すなど、数多くの残酷な手段を用いた。その第十六師団の少尉２名は殺人を娯楽化してどちらが先に100人殺すかの「殺人競争」を行なった。戦後、極東国際軍事裁判での判決では「日本軍が占領してからの6週間のうちに南京や近郊で虐殺された民間人や捕虜は総数20万人以上……この数字は長江に打ち捨てられた遺体、穴を掘って埋められた遺体などは含めない」と語られている。中国南京戦犯審判軍事法廷での判決では「捕えられた中国の軍人・民間人で日本軍に機関銃で集団射殺され遺体を焼却、証拠を隠滅された者は19万人あまりいる。ほかに、各地で殺され、慈善団体によって回収された遺体が15万あまり。被害者の総数は30万人を超える」と述べている。

極東国際軍事裁判の判決書では日本軍による婦女強姦を次のように書く。「占領後1ヵ月のうちに、南京市内で2万件前後の強姦事件が発生した」。老若の見境なく、上は6、70歳の老婆、下は7、8歳の幼女が襲われ、妊婦や尼僧にも容赦なかった。ある者は一晩に40回も強姦され、ある者は陰部に木の棒、竹竿、酒瓶を入れられ、さらにひどいケースでは日本軍

が余興の目的で無理やり老人に息子の嫁を犯させ、父親に娘を犯させ、息子に母親を犯させ、僧侶に犯させたりした。多くの婦女が強姦され、凌辱が終わると殺された。

日本軍は南京城に侵入すると、南部の中華門から北に向かい、夫子廟、太平路、中正路（現在の中山南路）、国府路（現在の長江路）、珠江路、下関などで大規模な放火を行なった。往時の繁華街の商業エリアはみな火災で焼かれ、それらの地ではビル、商店、民家の大部分が廃墟と化した。南京城では6週間にわたって燃え続け、市内全域の3分の１が焼失した。

日本軍は南京に侵攻する前後から南京市一帯において大規模な略奪を行なっており、車輛、文物、食糧、家畜、骨董品、装飾品、衣類、ボタン、手袋、金銭、卵など、盗まない所はなく、外国居留民の財産も例外ではなかった。戦後の不完全な調査統計によれば、略奪されたのは器具30万9223件、衣類591万4725件、現金44万7958元、金銀宝飾品6345件、書籍14万8619冊、書や絵2万8482件、骨董品7321件、車輛956台、家畜6277頭、食糧1208万7975石で、当時の価値で2317億元あまりになる。

こうした被害を受けた南京は、市内一帯が傷つき、うらさびれ、田畑は荒れ果ててしまった。日本軍による南京大虐殺の暴行は、南京の人たちの生命や財産に巨大な損失を与え、彼らの心に深い傷を与えた。同時に南京の社会、経済、文化を破壊し、南京の農工業の生産を根底からぶち壊した。

南京大虐殺の生存者とは南京大虐殺が行われた期間に南京

に滞在し、日本軍の暴行の被害を直接受けたか、もしくは暴行を目撃、耳にした歴史の当事者、証人である。

これまでの78年間に数回にわたって生存者捜しが行なわれ、生存者の認定や調査が進められてきた。主に以下の通りである。

第１に、南京大虐殺の期間およびその後に南京に滞在したドイツ人商人のジョン・ラーベ、アメリカ人牧師のジョン・マギー、デンマーク人エンジニアのシンドバーグなどの外国人が、李秀英、夏淑琴ら一部の生存者を発見、救助した。これらの生存者の名前や被害の経緯は外国人たちの手紙、記録、報告書、抗議書、映像作品に残されている。

第２に、戦後の1945年から46年にかけて、国民政府は極東国際軍事裁判と中国南京戦犯審判軍事法廷の要請で南京において大規模な幸存者調査を行なった。その記録は中国第二歴史檔案館と南京市檔案館に保管されている。

第3に、1984年から1985年にかけて、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館の建設準備のため、南京市は玄武区、鼓楼区、白下区、秦淮区、建鄴区、下関区、雨花台区、栖霞区、浦口区、大広区の6市区、4近郊地区で大規模な調査を実施し、1756名の生存者がみつかった。1991年夏、南京市教育局は侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館と共同で、この1756名の生存者を再訪したが、400名あまりが逝去されていた。

第4に、1997年夏には、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館が「歴史の証言をのこす――南京市1万人の青少年、南京大虐殺生存者を探し尋ねる活動」というテーマのサマーキャンプ

を行ない、東京、大阪、名古屋、広島などからの26名の日本人学生を含む1万4700名の大学生、高校生が参加した。この活動で、2460件あまりの生存者に関する情報が見つかり、専門家の認定と考証によってあらたに1213名の生存者がみつかった。その後も侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館は生存者の訪問と調査を一貫して続け、北京、武漢、陝西、中国台湾、ニュージーランドなどでも生存者が見つかっている。資料の収集や整理の事業も行なわれており、一部のモデルケースになる生存者の口述資料は司法公証に用いられている。

南京大虐殺の生存者の証言は歴史的価値が高く、後世の人々に多くのことを考えさせる……その１つは南京大虐殺の歴史に実証を提供することである。学問上の証拠の角度から言えば、歴史研究は「現場の人や出来事」を重視する。南京大虐殺の生存者は当時その現場にいた歴史上の当事者であり、彼らの証言は口述の歴史として、この歴史の一次的な実証資料にほかならない。南京大虐殺から半世紀以上が過ぎて久しく、生存者も高齢になっている。しかし、あの骨身に浸みわたる歴史の記憶を、彼らは永久に忘れない。彼らの血と涙にあふれた訴えを通じて、人々は歴史の真相を理解し、日本軍の非難されるべき暴行のありさまを知ることができる。

もう1つは、生存者の証言が歴史教育と国際平和教育の貴重な教材になる点である。南京大虐殺は第２次世界大戦上の3大惨劇の１つとして、そして極東国際軍事裁判の典型的な判例事件として、重要な歴史価値を持ち、国際的に注目される題材である。長年、南京大虐殺の生存者は特定な群体の一員と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

して、その証言は事件の歴史とともに国際社会から広く注視されてきた。夏淑琴、李秀英、倪翠萍ら生存者は、日本、アメリカ、デンマークなど多くの国に招かれて国際平和集会に参加し、歴史の情報を伝え、平和の声を届けている。

そのほか、生存者の証言は国内外の右翼勢力が南京大虐殺を否定することに反論する有力な武器になる。近年、世界中で第2次世界大戦の歴史事実を修正、否定する言行が出現している。特に日本の右翼勢力はさまざまな手段を用いて南京大虐殺の歴史事実を矮小化・否定することを企み、極東国際軍事裁判や中国南京戦犯審判軍事法廷が下した歴史的判決に挑戦し、第2次世界大戦での侵略、加害の事実を否定しようとしている。しかし、生存者の証言は最も説得力ある史実データであり、歴史否定論者に向けた有効な剣になるものだ。

こうした点から、南京大虐殺の生存者の証言にもとづく本書は、中国人民抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利70周年に向けて特別に世に贈り出した一冊と言うべきものである。

集団虐殺編

1937年12月13日に南京城が陥落してから1938年1月まで、日本軍は南京において中国の軍人と人民を対象に大規模な虐殺を行なった。中国南京戦犯審判軍事法廷における戦犯・谷寿夫に対する判決書の付録の統計によると、主に以下の通りである。

1937年12月15日、司法院難民所内の長警、警官、軍人と民間人2000人あまりを漢中門外で機関銃により銃殺した。民間人、将兵9000人あまりを海軍魚雷営に連行し、機関銃の集中掃射で銃殺した。住民300人あまりを挹江門姜家園南首で機関銃により銃殺、もしくは火をつけて焼死させる。12月16日、難民5000人あまりを中山碼頭に連行し機関銃の集中掃射で銃殺。民間人・呂発林ら100人あまりを鼓楼四条巷の池のあたりで機関銃により銃殺。民間人・謝来福ら200人あまりを大方巷の池で銃殺。石岩ら軍人と民間人数百人を大方巷の広場に集めて機関銃で銃殺した。12月17日、三汊河放生寺、慈幼院

難民所などで民間人4、500人を集団銃殺。12月18日、捕虜および難民5万7000名を下関草鞋峡に集めて機関銃掃射、銃剣によるめった刺し、最後は火をつけて焼却した。下関南通路の北で軍人と民間人300人あまりを麦畑に集め、機関銃で銃殺。大方巷難民区の青年・単耀庭ら4000人を下関に連行して機関銃で銃殺。12月19日、龍江橋のたもとで軍人と民間人500人あまりを機関銃で銃殺、さらに火をつけて焼却した。12月の間に、燕子磯の川岸で武装解除した青年5万人あまりを虐殺。上新河地区で軍人と民間人2万8000人あまりを虐殺。下関九甲墟の川辺で兵士500人あまりを銃殺。南門外鳳台郷、花神廟の一帯で、難民5000人あまり、兵士2000人を虐殺。このほか日本軍は煤炭港、豆菜橋、三十四標、老江口、陰陽営、山西路、江東門、莫愁湖、許巷村、許家村、江心洲、浦口、史家大窩子、板橋、永定村、上坊、笆斗山、湯山などの地で、武器を捨てた中国軍人と罪のない市民100人以上に集団虐殺を行なった。さらに郊外各地のより多くの場所で、日本軍は捕虜軍人や数十人の市民・村民を、ある場合は広場、池に連行し、ある場合は村内や山のふもとに集めて集団ごと殺した。1947年3月10日、中国南京戦犯審判軍事法廷は判決の中で「捕えられた中国の軍人・民間人で日本軍に機関銃で集団射殺され遺体を焼却、証拠を隠滅された者は、単燿亭など19万人あまりに達する」と述べている。本編で取り上げる26名は集団虐殺の中で幸いにも死ななかった者が、世間を驚かせ，全世界を驚愕させた大虐殺をこの目で見、もしくは現場で耳にした者たちである。

国際安全区内での日本軍の集団虐殺に遭遇した生存者5名の記憶

1. 朱伝安の記憶——国際安全区大方巷での日本軍による集団虐殺で、親方の3人の息子、1人の弟子ら200人あまりが銃殺され、遺体は近くの池に捨てられた。

1937年12月中旬から1938年元旦頃にかけて、通済門の鍛冶職人の親方の下で学んでいた私は南京国際安全区でこの目で南京大虐殺の状況を見た。

1937年12月中旬、私は難民区の通済門に通じる路上で日本軍のために旗を立てていたが、親方の3人の息子、1人の弟子、隣家の5人を含む難民たちが日本軍

に連行されているのを見た。その日の夕方5時頃、彼らは上海路近くで、日本軍により殺害され、遺体は池に捨てられた。2つの池に200体以上の遺体〕があった。

12月20日頃、私は通済門から難民区に向かっていたが、路上で日本軍に捕まり、荷担ぎをやらされた。その際、三牌楼の近くで3人が日本軍に射殺されるのを見た。

1938年の元旦からまもないある日、私は山西路から通済門に向っていたが、路上で日本兵に見つかり、「花姑娘（慰安婦）」を探すよう命じられた。私は探してあげるふりをして、壊れた家屋の中に入って、こっそりと裏口から走り去った。ショックで家に帰ってから病を患い、数ヵ月も続いた。

2．鄧明霞の記憶——国際安全区大方巷の池の近くでの日本軍の集団虐殺で、私の夫・鄧栄貴は日本兵に殺された。

1937年12月、日本帝国主義が南京を侵攻した時、私たち家族は漢西門堂子街から華僑招待所難民キャンプに避難していた。12月27日午前9時頃、日本兵が華僑招待所に突入してきて、3挺の機関銃を難民たちに突き付け、青壮年男子を連行した。全員を一列に縄で縛り、大方巷の池に連行して機関銃を掃射した。一度に数百人が殺され、池の水は真っ赤になった。難

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com